2015年10月18日中原教会メッセージ

招きの言葉

讃美歌

聖書箇所：第二列王記2:1-14

**「エリアとエリシャ」**

　本日の聖書の箇所は、イスラエルの分裂王朝が始まって60年くらいした北王国での話です。当時いた有名な預言者エリアからエリシャという青年が後継者となる話です。まず、当時の政治状況について若干ご説明いたします。ダビデによって創られたイスラエル王国はその子ソロモンに受け継がれ、ソロモン治世における過酷な税金、異教の風習の採用等を原因として、死後に反乱が起きて、イスラエルは北のイスラエル王国と南のユダ王国に分裂します。南のユダ王国はダビデの血統であるレハベアムが王となりますが、北王国であるイスラエル王国はソロモンの時代に強制労働の監督をしていたヤラベアムが王になりました。北王国と南王国では、北王国の方がずっと大きく、強大でした。ユダ王国の方はこじんまりとまとまっていたのですがイスラエル王国の方は内部的混乱が絶えませんでした。ヤラベアムは金の子牛を拝むという偶像礼拝を行い「ヤラベアムの罪」として列王記記者から忌み嫌われています。ヤラベアムの死後その子のナダブが王となりましたが一年で暗殺され、バアシャという人物が王になります。バアシャの後はその子のエラが後を継ぐのですが二年もしないうちに父の将軍であったジムリによって殺害され、そのジムリが王になります。ところが同じくバアシャの将軍であったオムリが軍によって王にされ、ジムリを自殺に追いやり、王となります。これが44年続くオムリ王朝の始まりです。オムリはイスラエル王国を軍事的に強力にし、ユダ王国の東のモアブも支配下におきました。また新しく都をサマリアに造りました。しかし、宗教的には「ヤラベアムの罪」に歩み、偶像礼拝を続けました。またその息子のアハブにフェニキアにあるティルスという都市国家の王女イゼベルを妻としました。このイゼベルはフェニキアの宗教を公然と持ち込み、列王記記者から強烈な非難を受けています。この時、「主なる神」ヤハヴェの信仰をもって王に神の怒りの言葉を投げかけたのが預言者エリアです。バアルの神官との戦いに勝利し、イスラエルの信仰の復権をしましたが、王家のバアル神崇拝もあわせて行う態度は改まりませんでした。その預言者エリアの後継者となったのが、ヨルダン川西岸にあるアベルメホラの農民の子エリシャでした。オムリ王朝は二代目アハブのあとアハズヤ、ヨラムと続きますが、エリシャはその間ずっと「主なる神」への信仰に立ち帰るよう預言を語り続けます。ついに、エフーいう人物が謀反を起こし、オムリ王朝を断絶させ、自ら王となり、「エフー革命」と称する、ヤーヴェ信仰のみとする宗教改革を行います。それでもバアル信仰は根絶されず、エフーの後にも続きます。エリシャはエフーの後の王エホアハズ、ヨアシュの時まで預言をしますが、イスラエルの罪を取り去ることは出来ませんでした。列王記記者によればこの罪の結果、イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされる、というのです。本日の聖書箇所は、エリシャが登場し、エリヤの後継者として世に出る時の話です。

　エリアはギルガルからべテルに行くとき、エリシャに「ここにとどまっていなさい」と言います。しかし、エリシャは「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたから離れません」と言いますので、エリヤはエリシャをつれてベテルに行きます。このあと、エリコに行くとき、ヨルダンに行くときにもこの会話が繰り返されます。べテル、エリコ、ヨルダンの地名から見て、これらの地にはエリアの弟子である預言者集団が居たと考えられます。エリヤは自分の死の時が近づいていることを悟り、弟子たちに最後の言葉を伝えるためこれらの地に赴くことにしたのだと思われます。べテルは神殿もあった宗教都市、エリコは今や荒野となっている修行者の地、ヨルダンは水で清めを行う聖なる地、といえます。エリヤは当時高名な預言者でしたから、かなりの数の弟子が居たと思われます。エリヤはそっとこれらの地を訪問し、そのあとは静かに死を待つことにしたいと考え、一人で旅に出たいと考えたのでしょう。エリシャが言った言葉の最初の「主は生きておられれ、あなたのたましいも生きています」というのは誓約をするとき、その約束は神様の前で行う絶対的なことである、ということを言うための言葉です。直訳しますと「主、命。あなたの魂の命」です。ここでの「主」はヤーヴェです。新共同訳では「主は生きておられ、あなた自身も生きておられます」となっています。カソリックのフランシスコ会訳は「生ける主と生けるあなたに誓って申します」と意訳されています。「生きておられる主、生きているあなたの魂に賭けて誓います。この誓いを破れば生きておられる主は放置することはなく私は滅ぼすでしょう」ということです。日本語流にいえば「神かけて誓う」ということです。エリシャの決意のほどが示されています。変な言い方かも知れませんが主に従って行く、ということは命がけであり、はたから見ると、大変しつこく見えることでもあります。かっこうなど構っていられません。何としてでも天国までついていくことです。この最初の「主は生きておられる」という表現は、旧約聖書全体で41回も出てくる表現です。典型的な箇所一か所だけお読みいたします。詩篇18:46です。「主は生きておられる。 ほむべきかな。わが岩。 あがむべきかな。わが救いの神」とあります。

　次にべテルの「預言者のともがら」がエリシャに“エリアが我々から取り去られる日が近い”ということを言いエリシャがこれに対し“私も知っていますが、黙っていてください”と言う場面がでてきます。これは次のエリコにおいても繰り返されます。「預言者のともがら」と訳されているのは直訳すると「預言者の子」です。「人の子」とか「イスラエルの子」とか言う表現と同じで「子」というのは子孫です。父と子の関係にある者の連鎖です。ここではエリアの弟子をその子と見做しているのです。エリシャもエリアの子ですから、この地にあるエリアの子はエリアの「ともがら」になる、という訳です。エリアの友人ということではありません。弟子です。フランシスコ会訳は「預言者の子ら」と訳しています。新共同訳は「預言者の仲間たち」と訳しています。ギリシャ語訳、ラテン語訳、ルター訳、英語訳のほとんどは「預言者の子ら」です。唯一、福音派の「新国際訳」が「預言者の仲間」です。エリシャがエリアのあとをついでから、エリシャの嘗ての同僚を指して「預言者の子ら」という言葉が使われるため、エリシャのともがら、の意味で訳したのだと想像されます。エリアが弟子と別れる日が近いと感じていることが弟子達にも伝わっていたが、エリシャはエリアが静かに去りたい、という気持ちを尊重し、送別の宴を設けると言うようなことをするな、と言ったのだと思われます。

　これらべテルで起きたことがエリコでも繰り返されます。そして最後の地のヨルダンにきます。ヨルダン川のほとり、ということです。ここでエリヤの弟子50人が見ている中で、エリヤは奇跡を行います。「エリヤは自分の外套を取り、それを丸めて水を打った。すると、水は両側に分かれた。それでふたりはかわいた土の上を渡った」と記されています。これはモーセの奇跡と同様の奇跡です。出エジプト記14:16です。お読みいたします。主なる神の言葉です。「あなたは、あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に差し伸ばし、海を分けて、イスラエル人が海の真ん中のかわいた地を進み行くようにせよ」とあります。またモーセの弟子ヨシュアも奇跡を行っています。ヨシュア記3:16です。お読みします。「上から流れ下る水はつっ立って、はるかかなたのツァレタンのそばにある町アダムのところで、せきをなして立ち、アラバの海、すなわち塩の海のほうに流れ下る水は完全にせきとめられた。民はエリコに面するところを渡った」とあります。この水を分ける奇跡は、神様が働いていることの証明なのです。エリヤはモーセ、ヨシュアの系譜に連なる預言者のリーダーであることを目に見える形で示したのです。神様は歩むべき道を備えてくださったのです。この場面はエジプトから逃げるためとか、戦闘の必要性からヨルダン川を渡らねばならない、というような必要性があった訳ではありませんから、象徴的な行為です。弟子たちの居る前で、エリシャを後継者と指名する前に、主の備えた道を共に歩くことにより、エリシャに権威を授けたのです。エリシャにとってみるとエリヤは主人ですから、この歩みは“主共にある”ということの証です。“主が道を備えてくださる、そして共に歩いてくださる“ということです。

このあとの会話がおもしろいです。エリヤはエリシャに「何を求めるか」と問います。これに対しエリシャは「では、あなたの霊の、二つの分け前が私のものになりますように」と言います。これはイスラエルにおける相続の決まりをあわせ考えなければなりません。イスラエルの定めは長子は次男以下の子どもの二倍の相続権がある、というものです。長子の特権といいます。エリシャはエリヤの質問に対し、長子としての後継者にしてください、と求めているのです。これに対し、エリヤは明確な返答をせず、神様にゆだねます。「もし、私があなたのところから取り去られるとき、あなたが私を見ることができれば、そのことがあなたにかなえられよう。できないなら、そうはならない」と言います。神様が権威を授ける時は、神様の完全な自由な決定であり、師といえ最終決定はできない、ということを意味しています。もちろん、エリヤはエリシャを後継者にするつもりでいましたが、最終決定は彼の為すべきことではないのです。エリヤほどの人物でも神様の領域を侵すことはできないのです。王の任命も同様です。神様の決めるべきことには預言者であっても代わりをすることは出来ないのです。これはイスラエルの信仰の特徴的なことです。神様の最終的な自由は確保されなければならないのです。パウロは「主にあって」という言葉を使用しますが、これは「主にあることを許されて」ということであり、主の自由なる選びが前提になっています。私たちに与えられる使命も、神様の自由なる選びの中に在る事柄である、ということを心に留めておく必要があります。主があなたを選び、弟子とし、道を備え、共に歩んでくださる、ということです。こんなこと、本当でしょうか。エリヤがエリシャに暗示し、主イエスが私たちに約束して下さいました。

　そして、ついに、11節で「なんと、一台の火の戦車と火の馬とが現れ、このふたりの間を分け隔て、エリヤは、たつまきに乗って天へ上って行った」とあります。ここにはエリヤの死は記されていません。実は死んだ、とされていない人物が旧約聖書にはもう一人おります。創世記5:24に「エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった」とあります。その後、この二人は死を見ずに生きたまま天にあげられた、という伝承がイスラエルに定着致します。この二人は黄泉に行くことなく天上にて、神様と共にある、という信仰です。エノクについてはエノクによる神の言葉を記した書物が多く残されています。但し、聖書の中には入っていません。エリアについては、この世に再び来る、という信仰が確立していきます。旧約聖書の最後にある文書でマラキ書の4:5にエリア再来のことが記されています。「見よ。わたしは、 主の大いなる恐ろしい日が来る前に、 預言者エリヤをあなたがたに遣わす」と言われています。このエリアの再来は新約の時代にバプテスマのヨハネとみなされたり、主イエスがこのエリアではないか、といううわさが流れたりしたことが記録されています。また、主イエスの姿変わりの箇所で、モーセとエリアと主イエスが話し合っているという場面が描かれています。ここで現れている「火の戦車」とか「火の馬」というのはこの箇所の独特な表現ですが、「火」は神の権威の象徴としてしばしば使われます。実はエリシャがアラムとの戦いの時、奇跡を行いますがその時、「火の馬と戦車」が再びでてきます。6:17です。お読みします。「エリシャは祈って主に願った。「どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」主がその若い者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた」とあります。カソリックの聖書には外典として入れられている文書に「ベン・シラの知恵」と言う文書がありますがそこでエリアが後任の預言者を任命しそして「火の馬車、火の旋風に巻き上げられ」た、と言われています。列王記の記述と少々異なりますが「火」は共通です。他の宗教でも「火」は神様と関連づけられている場合はよくあります。ペルシャで発生したゾロアスター教は「拝火教」とも呼ばれ「火」を礼拝します。日本でも仏壇のろうそくを始め宗教的場面ではしばしば見られます。しかし、イスラエルの信仰では「火」は神様の権威の象徴ではあっても拝む対象ではありません。火が燃えるというのは不思議な現象ではあったでしょうが、神様とは完全に切り離されています。イスラエルの神はあくまで見えない、この世から超越した神なのです。

　そしてエリアが最終的にエリシャを離れていく時となってしまいます。ここでエリシャは「わが父、わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち」と叫びます。これは“我が父エリヤよ、イスラエルの戦車であり騎兵であるエリヤよ、行ってしまわないでください”という叫びです。13:14に同様の表現がでてきます。エリシャの死の間際に時のイスラエルの王ヨアシュがエリシャの上に泣き伏して「わが父、わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち」と叫ぶのです。そして、エリシャは「自分の着物をつかみ、それを二つに引き裂いた」とあります。深い悲しみの表現です。創世記37:34では「ヤコブは自分の着物を引き裂き、荒布を腰にまとい、幾日もの間、その子のために泣き悲しんだ」とあります。イエス様の十字架の場面で「神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた」とありますが、これもこの「着物を引き裂く」ことと繋がっているように思われます。抑えられない、深い悲しみの時である、というのです。そしてエリシャはエリヤの外套が落ちているのに気づきます。そしてその外套によって水を分ける奇跡を行い、ヨルダン川を渡るのです。先ほどエリヤが行った、この水をわける奇跡を行うことにより、エリシャは公にエリヤの後継者と認められることになったのです。この時、エリシャは「エリヤの神、主はどこにおられるのですか」と言っています。これは単に「主はどこにおられるか」という疑問を提示しているのではありません。また「主はどこにおられるのか、どこにもおられない」という反語表現でもありません。「主はどこにおられるのか。あくまでも見出し、つき従う」という決意の表明です。信仰告白です。エレミア書2:8に同様の使用例があります。お読みします。「祭司たちは、 『主はどこにおられるのか』と言わず、―――預言者たちはバアルによって預言して、 無益なものに従って行った」。”祭司たちは主なる神にどこまでも従うと言う信仰を示すのでもなく、預言者たちは、無益なものに従っていった“と言われています。こうしてエリシャはいよいよエリアの後継者としての歩みを始めることに決定づけられたのです。

　以上がエリヤからエリシャへの預言者職の継承場面ですが、この二人をもって旧約聖書は本格的な預言者が登場し、イスラエル信仰の方向が決定づけられます。もっともこれら二人の前にも預言者はおります。古くはダビデ王のウリヤの妻を奪った罪を指摘したナタン、北王国初代の王ヤラベアムの妻にその子を始め一族が滅亡すると伝えたシロの預言者アヒヤ等です。預言者は神様から言葉を預かって人間に伝える役割の者ですが、概して、手厳しい批判の言葉を投げかけます。為政者に罪を指摘し、神の罰が与えられる、ということを常とします。エリヤも同様です。偶像崇拝で悪名高い北王国の王アハブやアハズヤに容赦ない批判の言葉を向けます。エリシャも同様です。特にエリヤは預言者の代表格であり、死を見ず天にあげられ再びイスラエルの救いのため、この地上に降りてこられる、という信仰が確立します。エリヤ、エリシャの時代が旧約預言者の創生期といえるでしょう。この数百年後、有名なイザヤとかエレミヤが預言することになります。新約の時代に入ってからもエリアが救い主来臨の前に来る、という信仰が強くありました。イエス様はこの預言者の伝統も背負っています。時の支配者サドカイ人、パリサイ人に対し手厳しい批判の言葉を投げかけます。私たちは主イエス・キリストの弟子として権力ある者に対し、神様の御心に反した事柄を為すことの無いよう、見張り、必要なときには批判の声をあげることが期待されています。この世がそもそも神の義とは異なる方向に向いているのですから多くの罪の業が存在することはやむをえません。しかし、忍耐の限度というのがあるのも事実です。特に、戦争とそれに付随して起きる大いなる罪に対しては我々キリスト者は平和の主イエス・キリストの僕として、声を発するべきであろう、と思われます。

　また、この物語を通して見るのは、エリシャのエリヤに付き従って行く必死さです。2節で「神に誓って、あなたから離れません」と言っています。4節で再びこれを繰り返しています。更に6節で三度目の「神に誓って、あなたから離れません」と言っています。また、9節で、私を、長子として跡継ぎにしてください、と懇願しています。エリヤが天にあげられた時は、13節で、自分の着物をつかみそれを二つにさき狂わんばかりのエリアへの忠誠を示しています。そして14節で主なる神を必ず見つけ、それに従っていく、という信仰告白を表明しています。徹底しています。私たちの信仰もこのような高みにまで引き上げられていくことを願いたい、と思います。祈ります。（天にまします父なる神様、今日、私たちをここに集めてくださり、主の御言葉を聞く機会をお与えくださり感謝申し上げます。本日は第二列王記からエリシャがエリヤより後継者として指名される箇所を学びました。エリシャが真剣にかつ必死にエリヤのあとを継ごうとしていることがわかりました。どうぞ。私たちも、真剣にかつ必死に主イエス・キリストの後をついていけますよう、知恵と力と勇気をお与えください。主のみ名により祈ります。アーメン。）